

第28回岐阜大学臨床セミナー 教育講演

期日：2013年7月28日（日） 15:00～18:00

場所：岐阜大学応用生物科学部1階・多目的ホール（旧101講義室）

<http://www.animalhospital.gifu-u.ac.jp/>

副腎皮質機能亢進症の診療

西飯直仁

岐阜大学応用生物科学部獣医内科学研究室

はじめに

副腎皮質機能亢進症は、副腎皮質ホルモンの過剰によって引き起こされる疾患であり、クッシング症候群ともよばれる。犬では比較的多くみられるのに対し、猫では非常にまれな疾患である。典型的な臨床症状がみられた場合にはこの疾患を疑うことは容易であるが、非特異的な症状や検査異常がみられるのみであることや、本疾患とは一見まったく関係がなさそうな異常しかみられないこともあり、そのような場合には診断にたどり着くのが難しい。また、診断のための内分泌機能検査は複数あり、手技も煩雑であることから、検査の的確な進め方について理解することが重要である。本講演では、副腎皮質機能亢進症について、どのように診断および治療を進めていくかを解説するとともに、副腎皮質機能亢進症の症例データからよりよい診療について考察したい。

下垂体性 vs 副腎性

副腎皮質機能亢進症は副腎皮質刺激ホルモン（ACTH）産生性下垂体腫瘍が原因となる下垂体性（PDH）と、コルチゾール産生性副腎腫瘍が原因となる副腎性（AT）に大別することができる。それぞれの割合については、犬ではPDHが80～85%、ATが15～20%といわれている¹。下垂体腫瘍のほとんどは良性であり、浸潤および転移の可能性は低い²が、腫大によって脳を圧迫し、神

経症状を引き起こす可能性がある²。副腎腫瘍では良性と悪性、両方の可能性があり、悪性副腎腫瘍の場合に転移が起りやすい部位は肝臓と肺である³。下垂体性または副腎性にかかわらず、また副腎腫瘍の良性または悪性にかかわらず、臨床症状は副腎皮質ホルモン過剰に関連したものがほとんどである。

診断の手順と各種検査の使い分け

臨床症状と検査異常

前述したとおり、犬の副腎皮質機能亢進症におけるほとんどの臨床症状は副腎皮質ホルモンの過剰に由来する。犬の副腎皮質機能亢進症では多くの場合、「最近やたらと水を飲んでいる」「おしっこの量が異常に多く、トイレが近くて困っている」「散歩まで我慢できないくらいおしっこが多い」といった多飲多尿に関する訴えや、「胴体の毛が抜けて薄くなってきた」「毛を刈ったら全然生えてこなくなった」などの皮膚症状がきっかけとなって動物病院に来院される（図1）。そのほかにも腹囲膨満、筋萎縮などの臨床症状がみられる可能性があるほか、血液検査でアルカリホスファターゼの上昇や高脂血症がみつかったり、画像検査で胆嚢病変が発見されたりすることから⁴、副腎皮質機能亢進症が診断されることが多い（表）。これらの診断のポイントを理解し、疑わしい症例